

N I C U長期入院児の院内および 退院後のケアに関する研究

一 厚生省N I C U基準下におけるN I C U 入院児の推移と長期入院児の現状 一

(分担研究：新生児・乳児の退院後の在宅
ケアシステムに関する研究)

研究協力者 橋 本 武 夫

要 約：厚生省N I C U基準を導入した時点の前後2年間の入院数と呼吸管理例を比較検討すると、入院数の低下と相反して呼吸管理(人工呼吸器使用)例が増加している。また入院児の体重分布では超、極小未熟児の入院の割合が増えている。

N I C U基準導入後約4年目のN I C Uの現状では、N I C U30床のうち16例が90日以上長期入院例を占め、本来のN I C Uとしての機能に問題を生じている。この事実からみても今後の在宅ケアの必要性がのぞまれる。

見出し語：N I C U、N I C U基準、長期慢性入院児、在宅ケア

研究方法：当新生児センターはBed数126床を有し、30床をN I C U、96床を中間、軽症例を収容するG C U (Growing care unit 継続保育室) と呼称している。昭和61年5月に厚生省N I C U基準を認可され、正式にN I C U30床として稼動開始したが、昭和60年9月から認可にむけて実質上N I C U管理が開始された。

それから、約4年を経過して、現在のN I C Uは長期入院児を多くかかえ、本来の重症の急性期ケアを主とする目的を逸脱している現状で

ある。よって、その現状を把握する意味から、昭和60年9月N I C U基準導入前後2年間の入院児の推移と、体重分布の推移、そして人工呼吸器使用例など、ケアの質の比較を含めて検討を試みた。

また、N I C U基準導入後4年目のN I C Uの長期入院児の実態を調査し、今後のN I C Uのあるいは、在宅継続ケアへの指標とすべく調査した。

結果：当院NICUへの入院数は、昭和55年の1590例をピークに、以後漸減し、昭和59年から62年まで、それぞれ1425、1272、1116、993例と減少している。

1) 昭和60年9月のNICU基準導入の前後2年間の入院数をみても、前期1390、後期1110例と減少している。

2) しかし、体重別にみると2000g以上の減少とは逆に、低体重児、特に超未熟児例の割合が増加している。

3) その間のNICUケアの質の変化をみるために、人工呼吸器の管理を必要とした例を比較すると、後期は入院児数の減少に比して人工呼吸器管理例が増加し、平均12名から平均18例へと濃厚治療が増えている。また、約4年経過した現在は平均20例の人工呼吸器管理例がNICUにいる状態である。

4) 平成2年1月31日現在新生児センター126床(NICU30+GCU96)とChronicNICU(4床)に入院中の児で90日以上長期入院児は、NICU12/30、GCU29/96、Chr.NICU4/4で計45例である。実に34.6%が90日以上長期入院児である。180日以上に限ると29例(22.3%)、1年以上では19例(14.6%)である。NICU、GCUのいずれをみても入院児の1/3は90日以上長期入院児であった。

5) 90日以上長期入院児45例の主要原因としては、BPD、CLD10、心奇形も含めた奇形症候群10、声門下狭窄も含めた抜管困難症8、無酸素性脳症7、超未熟児5、ウエルドニヒホフマンなど筋無力症3、その他2例であった。

6) それら45例の長期入院児についての今後の経過の予測として、検討してみると時期を待たばそのまま退院可能と思われる例が11、気管切開などの適応で在宅ケアへと移行できる可能性のある例が6、その他何らかの形で在宅ケアの可能性を有するものが10、重症心身障害施設へ予定された例が4、全く回復、退院の見通しが

ない例が14であった。

7) 最高在院日数は5才(2170日)で、672gにて出生し、BPD、CLDで現在CP、MR、Epilepsyの症例であった。

考察：出生率の低下や近隣地域にサブセンターなどの開設もあり、全体数としての入院数の減少がみられるが、昭和60年9月のNICU基準の適応以降、人工呼吸管理を要する症例、および超、極小未熟児の入院の割合が増加している。これはNICUにおいて濃厚治療という質の上昇を意味するといえるが、一方、そのためにNICU基準の30床を維持する際、このような長期呼吸管理児がベッドを占拠してしまうことになり、実際回転するベット数の減少を招いている。そのため、本来ならなおNICUで看護されるべき体重の軽い児まで、安定化しないうちにGCUに転出されてしまい、NICU同様の集中看護が要求されている。またNICU自体、その機能を十分に全うし得ない状態に陥っている。緊急的な対策としては、別棟にChronicNICUとして非常に長期にわたる4例を収容し、看護しているが、今回の調査例からすれば、この4床では焼け石に水の感さえある。

今後、NICU本来のケアを確立するためにまた、長期入院児の継続ケア、さらには在宅ケアについて、今回の調査をふまえてprospectiveなフォローを含めて検討を続ける必要があると考える。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:厚生省 NICU 基準を導入した時点の前後 2 年間の入院数と呼吸管理例を比較検討すると、入院数の低下と相反して呼吸管理(人工呼吸器使用)例が増加している。また入院児の体重分布では超、極小未熟児の入院の割合が増えている。

NICU 基準導入後約 4 年目の NICU の現状では、NICU30 床のうち 16 例が 90 日以上長期入院例を占め、本来の NICU としての機能に問題を生じている。この事実からみても今後の在宅ケアの必要性がのぞまれる。